

村上幸子著

『會議法の移入と発展

——國語表現法の基礎的研究——』

昨年十一月の中四国教育学会で、著者の研究発表をお聞きする機会を得た。大学の授業で扱われる「言語コミュニケーション論」の構築を目指しており、実際のご講義までが伝わってくるような内容であった。今回刊行された本書を読み、著者が大学時代に「話し言葉の教育」を研究テーマに選んで以来、一貫してこのテーマに取り組んでこられたことを知り、ご発表の根本になっている研究を知った。本書の構成を簡単に示す。第一・二章では『會議弁』（福沢諭吉）、『會議便法』（大島貞益）を分析・考察し、明治初年の時代背景の中で、どのように會議法が移入されたのか、その特質と受容を明らかにすることによって述べている。三章以下五章では、それぞれ小幡篤次郎『議事必携』、鳩山和夫『會議法』、望月小太郎『議會法——名義事学』を取り上げている。各書について、出版背景や与えた影響にも言及がなされており、近代時代がどのように西洋の會議法を受容し消化していったのかが理解できる。「會議法」に關してだけでなく「話し言葉の教育」についても基本文献となるであろう一冊である。

（A5判、二七〇ページ、一九九三年十一月十五日、

溪水社、三六五〇円）

（高橋 由美）